

大曲農業高 野菜部

レタスと幼虫 観察同時に



廃菌床用 循環型農業教材を開発



カブトムシの幼虫とレタスを同時に育てる循環型農業の教材を開発した関口部長(右)ら＝大曲農高提供



丹野課長(左)から表彰状を受け取る部員たち

部によるとシイタケ栽培で使い終わった廃菌床は横手市で年間360万個に上り、処理が課題。同市の農業ベンチャー企業「Pierz(ピーズ)」は廃菌床を粉砕、加工して、カブトムシ幼虫の餌兼ベッドとなる「Kマット」として販売している。このほか、幼虫のふんを使用済みKマットを活用した堆肥、育てた成虫の販売も手がけている。部

大仙市の大曲農業高校野菜部が、子どもたちに循環型農業への関心を持つてもらおうと、教材を開発した。シイタケ栽培に使った廃菌床を有効活用し、レタスとカブトムシの幼虫が同時に育つ様子を観察できる。開発の経緯をまとめて、地域を元気にする政策アイデアを競う内閣府の「地方創生政策アイデアコンテスト」に応募。東北経済産業局長賞を受賞した。

は同社の堆肥の有効性を確認して、商品化に協力した経緯がある。

オオカブトの幼虫を育てながら、同一ケース内で、幼虫のふんを活用してレタスを栽培する教材キットの開発に着手。レタスが傾いたり、根腐れを起したりしないように試行錯誤した。近隣の保育園や小学校に貸し出し子どもたちの反応を確認。今夏に納得のいくものができた。「循環型農業で奇跡を起こし、地域を活性化したい」と思いを込めて「ぐるぐるミラクルラフランス」と名付けた。

8月27、28日に大仙市などで開かれた日本学校農業クラブ東北連盟大会で研究発表し優秀賞を受賞。商品化する場合は「レタスに言及するな、新たな要素を加え、循環型農業の普及と地域振興を図る政策アイデア」としてまとめ直して内閣府のコンテストに提出していた。

東北経済産業局の丹野幸樹企画調整課長が11月29日、高校を訪れ、部員に表彰状を手渡した。丹野課長らは「仮説を立て、改善し、コスト試算までした点を評価した」「地域の人をたくさん巻き込んでいる点が素晴らしい」と「若い力は地域を愛する。自信を持ってどんどんチャレンジして」と激励した。

(佐藤拓)